

W. S. モーム作「ドン・フェルナンド」 の教えるもの

脇 田 勇

I

第一次大戦と第二次大戦にはさまった時期が、Maugham の創作活動が最高潮に達したと言える。この時期に彼の作家的資質にぴったりと合った〈一人称小説〉、即ち作家が小説の中の一人物として登場して狂言廻しの役割を演ずる技法を身につけたのである。 *The Moon and Sixpence* (1919) , *Cakes and Ale* (1930) , *The Razor's Edge* (1944) 等の長篇小説は皆この手法により、短篇小説にも *First Person Singular* (1931) 外相当数に上っている。

この間に短篇小説を多く出したことも注目されねばならぬ。 *The Trembling of a Leaf* (1921) が6篇、 *The Casuarina Tree* (1926) が6篇、 *Ashenden* (1928) が15篇、 *First Person Singular* が6篇、 *Ah King* (1933) が6篇、 *Cosmopolitans* (1936) が28篇、計68篇にのぼる。 *Ashenden* は彼の戦時中の諜報活動の経験にもとづいて書かれたものであり、その他 *Cosmopolitans* をのぞけば、大体はこの時期に世界の各地を旅行した経験がもとになっていることは注目に価する。元来 Maugham の旅行は新しい土地や生活を知る純然たる好奇心もあったろうが、それによって自分の作品に変化を与える意味も大きく働いていたことも容易に想像される。その場合短篇小説という形式が最も格好であったことは *The Summing Up* 56章に書いている通りである。従ってこの時期に Maugham が盛んに旅行したことと、短篇小説を多く出

したことは相互に関連性がある。1916年の南洋旅行は *The Trembling of a Leaf* となり、1920年の中国旅行は一方で *The Painted Veil* (1925), *East of Suez* (1922, play) を生んだ反面、他方では短篇小説からなる *On a Chinese Screen* (1921) となり、1923年の Borneo 及び Malay 半島旅行は *The Casuarina Tree, First Person Singular, Ah King* となったのはその間の消息を物語っている。

異郷に住む英国人又は西欧人の中から未知の新しい人間の型を探し当てる期待に胸をふくらませて、好んで僻地を歩いたと言ってよい。彼の感受性は写真の乾板のように印象を鮮明に記録した。それらの印象に想像力を逞しく働かせて、そこから一つの物語を発展させるのが、彼の何よりの楽しみだった。*The Summing Up* の次の言葉が明瞭にこの事を証明している。

I became aware of the specific benefit I was capable of getting from travel ; before, it had been only an instinctive feeling. This was freedom of spirit on the one hand, and on the other, the collection of all manner of persons who might serve my purposes. After that I travelled to many countries. I journeyed over a dozen seas, in liners, in tramps, in schooners ; I went by train, by car, by chair, on foot or on horseback. I kept my eyes open for character, oddness and personality....

I have never been much of a sight-seer. So much enthusiasm has been expended over the great sights of the world that I can summon up very little when I am confronted with them.... My interest has been in men and the lives they led.

(*The Summing Up*, Chap. 55)

私は旅行によって得ることのできる独特の利益を知った。それより以前は、それは単なる本能的な気持ちだったのである。この利益とは、一方においては魂の自由であり、一方においては、私の目的に役立つであろうと思われる、あらゆる種類の人物の収集であった。その後

も、私は多くの国々を旅行した。定期船、不定期船、帆船で、十指に余る大洋を渡り、汽車で、自動車で、轎で、徒歩で、馬で旅行した。そして性格や奇癖や個性にたえず注意していた。……私はあまり見物はしなかった。世界中の大観光地には、あまりにも多くの随喜の涙が注がれているので、私はそういうものに直面しても随喜渴仰することができなかった。……私の興味は人物と彼等が送っている生活にあった。

I came back from each of my journeys a little different. In my youth I had read a great deal, not because I supposed that it would benefit me, but from curiosity and the desire to learn ; I travelled because it amused me, and to get material that would be of use to me : it never occurred to me that my new experiences were having effect on me, and it was not till long afterwards that I saw how they had formed my character. In contact with all these people I lost the smoothness that I had acquired when, leading the humdrum life of a man of letters, I was one of the stones in a bag.

(Ibid., Chap. 55)

私は旅行から帰るたびに、すこしずつ変った。若い頃、私は無暗に本を読んだが、それは裨益するところがあると思ったからでなく、好奇心と知識欲とからであった。旅行をしたのも、面白いからと、役立ちそうな題材を仕入れるためとであった。新しい経験が、自分に影響を及ぼしつつあるなどと夢にも思い浮かばなかったが、そうした経験が私の性格を形づくって来たことを発見したのは、ずっと後のことであった。このような妙な人々と接触しているうちに、文学者としての退屈な生活を送り、袋の中の小石の一つであったあいだに得た円満さを私は失った。

所が旅行記の中で *Don Fernando* (1935) は他と違った特色を持っている。Spain に対する彼の情熱は *The Land of the Blessed Virgin* (1905) に、

・*Of Human Bondage* (1915) に、そして *Catalina* (1948) にも現われている。そして *Don Fernando* はある意味で彼をとく鍵となっている。Maugham は 1933年に13回目の Spain 旅行をした。この旅行記は直接にはその旅行が生んだものだが、決して普通の意味の旅行記ではない。

Don Fernando というのは、著者が Seville に滞在中、常に出入れした居酒屋の亭主の名前である。この男が他の骨董品と共に、著者に押しつけた古い小さな本が St. Ignatius Loyola の伝記であった。ここから Maugham の Spain 論の糸口が出てくる。彼は Ignatius の生涯を述べ、Catholic 教徒の宝典となっている聖人の著書 *The Spiritual Exercises* の内容を説明して、その心霊修行のことを詳細に伝えている。St. Ignatius から話題は一転してヨーロッパ近代小説の源流となっている Picaresque Novel (悪漢小説) を語り、古い文学作品に触れながら、Mateo Aleman や Vincente Espinel を語り、当然 Cervantes を論じ、次に劇作家の Lope de Vega に言及する。Spain という現実には realist で唯物主義者の Maugham に深い興味を起させたことは別に不思議ではない。悪漢小説の場合でも、彼は文学史上の重要性を論じているのでなく、そこにあらわされた、下層階級の赤裸々な人間性に自分で興じているようである。庶民の無知と貪食と粗暴、そしてその裏にある人間とヒューモアと悲哀を愛しているのである。彼は realist であり、materialist であるが人間の精神活動たる空想や神秘思想というものを無視していない。いや人間の実存 (reality) につながる、そういうものの価値を認めようとする、ある好奇心を持ちつづけていることは、彼の小説にもはっきりあらわれている。

Spain が Maugham の心をとらえてやまないのは、人間性にとって最も本質的な、しかも全く相反する要素——物質的なものと精神的なもの、現実的傾向と空想的傾向、実在性と神秘思想といった、両極端の二面が強烈に感じられるからである。Maugham の考えている神秘主義は、宗教的なものではない。それは、彼が人間の潜在意識に信を置いていることによるもので

ある。結局、*Don Fernando* において、最も際立っているのは神秘主義への興味と El Greco に対する情熱である。baroque 的で装飾的な Greco の絵にある優雅な美しさを見い出している所に Maugham の芸術観の一部がのぞいていると言っても過言ではあるまい。

彼は *The Land of the Blessed Virgin* (聖女マリアの国) という紀行を1905年に出している。これは1950年のアメリカ Knopf 社版では *Andalusia* となっているが、早くから Maugham と Spain は離れがたい関係になっていた。*Don Fernando* を書く動機は Spain の誰か面白い人物を主人公にした小説を書く意図からで、その歴史的背景について調べたのだが、遂に見い出すことが出来ず、途中で挫折したことを、この書の中で時々述べている。後に *Catalina* が出ているが、あるいはその具体化されたものかも知れぬ。*Don Fernando* は1935年に出版されたが、彼の円熟した時期の傑作 *Cakes and Ale* の出た数年後で、その2年前に *The Narrow Corner* (1933)、そのあとに *The Theatre* (1937)、*The Summing Up* (1938) が出ている。

極言すれば、*Don Fernando* は単なる旅行記でなく、Spain の最も繁栄した Golden Age の精神の領土をさまよい歩いていると言った方がよいであろう。つまりこの旅行は空間的というより、むしろ時間的である。〈悲痛な面持をした騎士〉であるとともに Sancho Panza でもあった Spain 人、アメリカ大陸の広大な国々を征服しながら終始飢えていた Spain 人、理想主義的、神秘主義的であると同時に、嘲笑的、現実的であった Spain 人、そういう多様性をもった人間に著者の好奇の眼が向けられているのである。そこにはあらゆる人間の資質が共存している。尊大で、礼儀作法にやかましく、激情的で、残酷無情、狂信的、猥褻で邪見な冗談を好む一方、寛大で、親切で、礼儀正しい。一見矛盾している如く見える性格が同一人に、同一民族にどうして同時に存在できるのかという興味がここでも顔を出しているのである。

Don Fernando の初版は16世紀の Spain についての書物を好まぬという

理由で読者がなかった。1950年に新版を出したのであるが、これは Desmond MacCarthy, Raymond Mortimer, そして Graham Greene などの批評を考慮して、冗漫の個所を削除して出版されたのである。削除された第一点は *Don Fernando* の中の多くは他の著書や Preface に言及されているということであり、第二点は Spain を旅行する英国人のために必要な Spanish の語句を教える会話の引用が10数頁に及んでいる個所である。

Heinemann 社版の *The Travel Books* の中には *On a Chinese Screen*, *The Gentleman in the Parlour*, *Don Fernando* の三書がふくまれており、その Preface で *Don Fernando* に対する著者の心境を述べている。それによると大略次の様なことが言及されている。この書物は旅行者が訪ねる都市や、注意を喚起する各所を取扱うのでなく、Spain の Golden Age への探究の旅である。そしてこの国の魅力は絶大で、なにがしの時間ここに滞在した人で、ペンをとるかタイプライターをたたける人なら、この国について一書を書かざるを得なくなったはずである。かかる作品は古典として楽しく読む事ができるとして Borrow's *The Bible in Spain*, Theophile Gautier's *Voyage en Espagne*, Ford's *Gatherings from Spain* をあげている。黄金時代は過去のものとなって相当の時間が流れているが、記憶の中に現在も生きていて、Spain のどの街かどでもそれが見い出される。現在 Madrid あたりで時たま黄金時代に生気を得た Lope de Vega の play が上演されるし、El Greco や Velazquez の絵に、その時代がうかがえる。多くの Spain 人にとってはその栄光の時代が心の支えであり、靈感の源となっていると語っている。

Don Fernando can only by courtesy be called a travel book, since, though it would never have been written but for my long sojourns in Spain, it deals for the most part not with the cities the traveller may visit nor with the famous sights that demand his attention and extort his wonder, but with excursions into Spain's Golden Age. So great is the fascination of that country that it is not a gross exaggeration to say that nearly anyone who has been there any

length of time, and can wield a pen or pound a typewriter, has found himself impelled to write a book about it. Some of these productions have become minor classics. Borrow's *The Bible in Spain*, Theophile Gautier's *Voyage en Espagne*, Ford's *Gatherings from Spain*, written during the first half of the nineteenth century, though they describe conditions that have long since ceased to exist, can still be read with pleasure. They have a romantic glamour that the writer of today cannot hope to recapture. Since then innumerable books have been published. Of those that I have read, the most useful is H. V. Morton's *A Traveller in Spain*. It gives the reader all the information he needs to make a journey in Spain instructive as well as delightful. This little book of mine can make no such pretensions; yet it may have an interest to anyone who has paid Spain more than a hurried visit and has succumbed to its lure; for the Golden Age, though long since a thing of the past, is still a living memory. It confronts you at every turn. It pervades the Escorial; it is with you at Avila and Salamanca; it animated the plays of Lope de Vega and Calderon, which are on occasion still acted in Madrid; it is there for you to see in the pictures of El Greco and Velasquez. To many a Spaniard, to far more than you would suppose, that moment of glory is a support and an inspiration. Now and then a trivial incident, a casual remark, will bring it so close to you that you are dazzled.

(*The Travel Books*, Preface)

II

筆者はこの章において、Maugham が Spain において魅力を感じた事項を忠実にあとづけて見ようと思う。

Maugham は Seville の酒屋の主人 Don Fernando より20ペセタで木像と一冊の書物を買わされる。その書物の物語は名家 Don Beltran Yañes de Oñaz とその妻 Doña Maria Saez de Balda との間に生れた13人の子供

の末弟 Don Iñigo についてであった。戦傷をうけた足の恢復期に徒然のうち、キリストの一生に関する書物と、*Flos Sanctorum* (聖なる花) という名の聖人の物語を読んで感銘をうけて、その中に記された偉大な行ないにあやかりたい欲求にかられる。一方では過去の華やかな生活が脳裡をはなれず、自分の武勲や、宮廷の楽しい勤めや恋の思い出につきまといられる。聖なることを思うとき、彼は歡喜に満たされるのであるが、反対に俗世のことを思うとき、不満でいっぱいになるのを自覚するのである。この若い武人はついにキリストの道に従おうと決心するが、この時家鳴り震動して、頑丈な石の壁は全体に亀裂を生じたという。彼はキリスト教の聖地エルサレム行きを決心し、それまでに断食、懺悔、肉体的な懲らしめによって、自分の生身を虐げ苦しめることにする。彼は自分がみならおうとする聖人達が行なった如く、自分の身体に厳しい苦行を課して己を高めようとしたのである。Monserrat にある Benedictin 会の修道院で苦行に入り、自分の罪を深く悔いて、これからの一生をその償いにあてることに決心する。Manresa では毎日、三回ずつ自分の身体を打ちこらし、膝ついて坐ること七時間にわたった。毎日、ミサに、晩禱に、終禱に出た。毎日、喜捨を乞うた。だが彼は肉は食べず、酒も飲まず、ただ水とパンをとるだけであった。彼は地面に寝て、夜の大部分を祈りで過ごした。しかし彼の心の一角に、この様な苦しみがこれから70年も続くであろうが、この様に厳しく、みじめな野蛮人にも劣った生活を送ることは、とても堪えられぬという考えが、浮かんでくる。しかし彼は〈70年の懺悔も、永遠の責苦にくらぶれば、何かあろう〉と答えて、この苦難に自ら挑んで行くのである。ある日 St. Dominic の教会の石段にひざまづいて祈っている時、自分の精神が昂揚するのを感じ、肉眼で見ると同じように三位一体の形を見たのである。ついに聖地エルサレム巡礼の時が到来する。ひたすら神への信頼をもって、単身、バルセロナに向い、遠い目的地をさして出かけたのである。これが一人の紳士 Don Iñigo de Oñaz の若い時代の物語で St. Ignatius Loyola として歴史上知られている人で、

Don Fernando から買った書物は実はこの Loyola の伝記で、彼の死後 Company of Jesus (イエズス会) の Pedro de Ribadeneyra 神父の綴ったものであった。

St. Ignatius は Manresa で *The Spiritual Exercises* (霊操) という書物を書きはじめた。法王 Leo XIII がくここに、余が自分のたましいのために欲したものがあると述懐したと言われるこの書は、読んで畏怖の感に打たれると強い感銘を告白している。この書の完全な題名は *Spiritual Exercises for overcoming oneself and regulating one's life without being swayed by any inordinate attachment* (霊操、過度の執着に支配されることなく、自己にうち克って、自分の生活を正しくするために) というのであった。この中では、修行をなすものが、精神の集中を得て、自分の欲することを遂げることができるように、いくたの教訓が与えられている。例えばく……私が目ざめて……すぐに、真夜中の最初の修行にどういう冥想をするべきかということに思いをいたし、自分の多くの罪を考え、いろいろの例を持ち出して、その苛責に心は千々に乱れてしまうとき、たとえてみれば、騎士が王とその臣下が悉く居並ぶ前で裁きをうけるようなもので、これまで数多くの賜わりものと恩恵をうけた王をいたく怒らせたことに、恥辱と狼狽で我を失っていると同じであるくという様な教訓である。そして罪を犯した者がやがて至る運命の生々しい地獄絵を、読者に描いてみせたあとで、著者はこれが永久につづくものだとはっきり語っている。地獄に堕ちた者は、そのたましいが永久に罰せられるのみならず、また肉体も同じで、彼等は死を欲するであろうが、死も彼等から遠のいてしまうと語る。

Maugham は Loyola の *The Spiritual Exercises* の中で一番興味をそそられたこととして Particular Examen (特別糺明) と General Examen (一般糺明) のことに最後にふれている。St. Ignatius は多くの生きている精神を、彼自身のかたちに則ってつくる芸術家である。彼は詩人が詩をつくるように、そういうたましいをつくるのである。しかし知性を養うことより、む

しろ人格を強固にすることを求める。盲目的な服従ということが彼の要求するところであって、だれにも、自分ひとりで考えるという楽しい自由は許さなかった。我々は今更、暗示ということの重大であり、その力によって、いかに不思議なことが行なわれるかということを知るのである。St. Ignatiusはその秘訣をみずから学んだのであった。

聖人の事については、再び10章においてふれている。神秘思想家が神秘主義を根本的に宗教的なものと考えるときは、それは誤っていて、宗教的神秘主義が唯一のかたちだとは思わない。もし神秘的経験を、われわれがそれに勝るよい言葉がないので、実在と名づけるものと接する、自由自在の感覚であって、それを好むままに〈絶対〉とか〈神〉とか呼ぶことができるならば、その時こそ、われわれは多少の差こそあれ、すべて神秘思想家になっていると語っている。

St. Teresa (聖女テレサ)の事をとりあげ、彼女の書いた一代記は世界の最もすぐれた自叙伝の一つ *The Confessions of St. Augustine* (聖オウガスチンの懺悔録)に比すべきものとしている。St. Teresaは〈神秘主義の道〉のいろいろな段階について最もすぐれた記述を示しているとし、その段階を附記している。第一の段階は〈浄化 (Purgation)〉といわれるもので、魂は〈神聖な美 (Divine Beauty)〉に目ざめて、それ自身の虚しさを悟るのである。祈りと苦行で第二の段階〈照明 (Illumination)〉に向う準備をする。魂は起自然なものに触れる。〈静寂の祈り (Prayer of Quiet)〉と言っている。冥想の時期である。意志は神に服従し、何も欲しないし、何も求めない。第三の段階は〈一致 (Union)〉の状態で、これが〈神秘主義の道〉の最後の到達点である。

何故 St. Teresa に興味をいただくようになったかについては、小説家として、この聖女の奇妙な個性が自分を魅了したと言ひ、彼女は素晴らしい頭脳を持った婦人ではなかったが、魅力と決断と勇氣とをそなえていたと思われると語っている。最後に、ルイス・デ・レオン師 (Fray Luis de Leon) のことにもふれて、かかる Spain の人々が自己を克服した個性の強さが、世

界の半ばを制覇した政治的意欲につながるものであると結んでいる。

Maugham は1905年、31才の時に *The Land of the Blessed Virgin : Sketches and Impressions in Andalusia* という紀行を出している。23才の時 Seville に行っていらい12回も出かけている。著者の感じ方は純粹であったが、Borrow, Richard Ford, Théophile Gautier, Mérimée の見たものを見たにすぎない。その本は未熟でセンチメンタルなものだと述懐している。次第に構想が固まり、Picaresque Novel (悪漢小説) に出てくるような、豊かで波瀾に富んだ生活を見せる機会を与えるようなテーマを望んで、その結果劇場を取扱おうと考える。Lazarillo de Tormes にはじまり Calderon に終る Spain の Golden Age (黄金時代) の戯曲は、単に国民的な熱情であったばかりでなく、この国民の芸術的努力の最も特色ある表現であった。それで Agustin de Rojas という俳優に関する小説を書いて見ようという考えを持つ。その冒険に富むロマンチックな生涯は、著者の必要とするあらゆる条件を十分に与えてくれるものであった。しかし余りにも行動的な性格の持主で、こうした人間は、ひとりで動き出して、作者が書こうとしていた作品と全く違うような作品にしてしまう可能性がある。そこでこれは実らずに終ってしまう。次にある Scotland 人を主人公にすることを考える。Madrid の宮廷に老 Elizabeth 女王から派遣された英国大使の縁者にか、Spain 王の下にか、自分の幸福を求めてきたのであった。こういう人物は著者の興味をそそる色々な世界を、いかにも真実らしく、動きまわらすこともできる。そうして当時の教養を豊かに身につけた、内省的な、注意深い青年に仕立てるならば、Spain 人の精神の様々な様相を研究する大変よい機会を得ることにもなる。その作品の中で扱う時代は、Lope de Vega が劇壇の偶像となっていた時代でもあり、Cervantes は *Don Quixote* をまだ世に出していないが、第一部の大かたを書きあげており、その幾章かを友人に朗読してきかせていた。画家の El Greco は Toledo で豪

華な生活をし、ちょうどその頃、イタリーの Venetia 派の桎梏から脱して、老境にあり、クレタ島にあった青春時代の活気に戻って、後の作品の中で最も異色のあるものを描いていた。Mateo Alman は悪漢小説の中で最も多く読まれた *Guzman de Alfarache* を書き、Vincente Espinel が、その皮肉な、老いた頭の中で魅力ある *Life of Marcos de Obregon* (従士マルコス・オブregonの生涯) の構想を練っていた。聖女 Teresa と話を交わした事のある学者や貴婦人と会うこともまだあったろうし、Salamanca の大学で Luis de Leon 師の講義を聞いたという学生もいたであろう。こういう着想のもとに仕事に取りかかったのであった。しかしこれは、ついに誕生しなかったのである。

Maugham のスペイン語に関する批評の言葉は興味深い。スペイン語には無数の熟語成句があつて、それがこの国語に鋭い味を添えている。他の近代語より、もっと複雑な仮定法があり、それが、言葉に優美さを与えている。英語では、この仮定法が相当失われて、それによるときは、キザッぽくきこえる。たとえ百姓でも、会話の中に、文法による仮定法の様々な形を第二の天性と言つてもよい正確さで使うのは驚くべきことで、言葉に敏感な人には大変面白い。スペイン語にはイタリー語のような快美な単調さはないが、弾んだ急速調の活力がある。スペイン人が語る Charles V の話にこんな話がある。王はドイツ語は馬に話しかける最上の国語、フランス語は政治家と会話するのに、イタリー語は婦人に語るのに、英語は鳥に呼びかけるのに、いずれも最上の国語であるが、スペイン語は王や大公、また、神に話しかけるのに用いられる唯一の国語であるというのである。

このスペイン語で書かれた *Don Quixote* を読めるといふのは大したことで、外国人が読めて、それだけあとに精神が豊かになるといったものは、この外にないことだけは認めねばならぬ。そのわけは、スペイン人は非常に際立って知的な国民でないということである。我々の世界の活発な要素とな

っている思想に、スペイン人が加えたものは驚くほど少い。その証拠に、一流の哲学者も科学者も出ていない。その理由は、Spain の作者が、生来才能が不足しているというよりも、その時代の環境によって打ちひしがれていたと考えられる。黄金時代の作家は、筆で生計を立てることが出来なかった。スペイン文学の傑作は、職業作家によるものでなく、素人の書いたものであった。Cervantes の如きも、職がない時だけ書いたのであった。Lope de Vega のみが、文筆を職業として成功した人であった。

全体として見られるスペイン文学の欠陥は、持続的な力 (sustained force) を持つ文学でなく、絢爛たる始まり (brilliant beginnings) の文学ということである。しかし美点は spontaneity (自然発露) と strangeness (奇異) である。そして土地の匂いがある。ヨーロッパ大陸を抑え、新しい世界を発見した、暴虐で、勇気に富み、熱情的で、理想主義的で、俗悪で、ヒューモアがあって、残虐で、人情に厚い人々を、Spain 文学は十分にあらわしている。

悪漢小説の広く行きわたった影響は英国にあらわれたが、その中の人物は社会の屑といった下層の人々で、主人公はいろいろのやり繰りで生活している。大抵は一人称で書かれている。スペイン文学の最も特質をあらわした形式である。もし悪漢小説の流行がなかったら、Defoe や、Fielding や、Smollett きては Charles Dickens の小説は、今日あるものと違ったものになっていたろう。悪漢小説は、Spain で永い間にわたり不当なほど喜ばれていた騎士道物語に対応するものであり、スペイン人の性格のもう一つの面、理想主義的で神秘主義的なものと不思議に堅く結ばれている。嘲笑的で現実的なものに対照するのである。この種の最初のものは、短い作品で *Lazarillo de Tormes* である。作者はヒューモアの持主で、小説を書くことで、修道士や僧侶について鋭い皮肉めいたことを言う機会を持ったのである。英国作家 Laurence Sterne の *Sentimental Journey* より短い作品で、主人公の無頼漢の生れや、子供時代、色々の主人公に仕えたこと、めくらの乞食、僧侶、地

方の地主、托鉢僧、贖罪符売り、警吏などのことを語っている。

次に *Guzman de Alfarache* をとりあげ、大ていの作家は退屈極まりなしというが、W. Hazlitt は大いに賞讃していると言い、それは飄逸と真面目な教訓が見事に混交しているからだと説明し、外国人が読んでも、文体が素朴で、気取りがなく、活々としており、英国ではこれより約百年後に Dryden がフランス語から学ぶまでは、見出すことのできない冷静と慎重さがあると批評している。

悪漢小説の熱心な読者に奇異の感を与えるのは、作者が当時の情勢を無視し、国家社会のあわただしい変化をよそに、依然として、宿屋の亭主の悪事や、乞食どもの手管や、やくざ達の窃盗を語りつづけていることである。これは Jane Austen が Napoleon 戦争の間にあつて、真面目な良家の人々の恋愛を書くことに甘んじ、Henry James が、米国が地方社会から一躍して、世界の列強になるのを目にしつつ、上流階級の貧血的な熱情を写すのに、筆をふるっていたのと同じで、むしろ小説家が、自分の国の幸福や文明の進歩に重大な意義を持つ多くの出来事に背をむけて、日常生活の事柄を描くのは健全な本能によるものであると言っている。

Spain が世界の文学中に確乎たる位置を持つ作品はただ一つしかない。それは *Don Quixote* である。スペイン人は、これは、低級な物質主義と高邁な理想主義の二つを持った彼等の国民性を、如実にあらわしているものと見なすようである。これを読む時は、彼等を世界で最も強大で、最も富んだ國たらしめた冒険に祖先たちをふるい立たせ、そしてやがては、崩壊と失墜においこみ、Roman Catholic を異端の徒に強いるため、富と人命を蕩尽するに至らしめた、あの激情を理解するのである。しかしこの作品ほど偉大で、しかもこれほど多くの欠点を持っているものを他に見つけるのも難しい。短篇物語としてはじめられ、友人達に朗読した結果、賞讃を得たので、今日我々の見るような書物にしたのである。そして所々に短い物語や田園物語をさしはさんだ。その不統一を批評家から非難されたので、第二部では、これらを

全体の中にひき入れた。Don Quixote が死の床で Cave of Montesinos の冒険談はつくりごとだと告白するのだが、騎士は自分が本当だと思わないことなど絶対いうことができない人間だということは、誰でも知っているので、この嘘をいわせたことは、主人公を傷つけ、更に自分自身も傷つけたに等しい。英国の詩人 Coleridge が全体を読み通すのは一度か二度でよいが、ある部分は何度もくり返して読むべきものであるといったのは適評としている。

悪漢小説からはスペイン人の行動や考え方の一部が得られるのみで、全体の図絵の片面にしか過ぎない。他の面は戯曲を見なければならない。戯曲は Calderon の死で終る百年間、いかなる時代、いかなる国にも見ない華麗さで栄えた。Lope de Vega 一人だけでも、英国 Elizabeth 朝と James I 時代の劇作家を全部併せた位の数多い作品を書いた。その数は二千二百篇といわれ、その中五百篇に近いものが残っている。彼は〈Phoenix of Wits (天才の不死鳥)〉と呼ばれた。言葉はやさしく、対話は辛辣でテンポが早く、ある時間内に進行する必要と、観察の興をひきずって行くという、もっと大きな必要のために、スペイン文学に共通な二つの欠陥、散漫と逸脱とに陥ることがなかった。Vega には活々としたヒューモアがあって、自分の芝居に出ず道化を活々とした人物とした。こういう道化は頭のよく働く悪党で、冷笑的な機智をそなえた皮肉屋であった。Calderon にはヒューモアらしいものはみじんもなく、滑稽を演ずる召使は、ひどく退屈なものである。しかし Calderon は当時の Spain に共通な神秘的な感じ方、即ち我々の生きている感覚の世界は、大きな精神的世界の一部分にすぎず、それあるが故に、この現実が意義あるものになっているというように考えていた。このことが、劇作家がめったに到達することのない崇高性を与えていた所以である。創意の才に乏しく、人物に対する勘がなく、人物で生きているものは少ないが、彼には個性があった。思うに個性こそ作家を生かし続ける唯一のものである。

もう一つ Calderon の戯曲を興味深いものにしてしているのは、名誉というものに対する先入観で、これからも亦、彼が当代の人情というものを忠実に

写していることが想像できる。自分の妻の貞操に関して向けられた疑惑ですら、男をひどく苦しめ、夜は眠られず、気も狂わんばかりになって、血をもって、それを拭い去らなければやまないのである。彼の作品で *El Medico de su Honra* (おのが名誉の医師) ほどそれがはっきり示されているものはない。

当時スペインの領土は広大で、その艦船は西インド諸島から測り知れない価値を持つと思われる金銀を、年々運んで来たにも拘らず、スペイン国民は飢餓に苦しんでいた。しかし飢によって、この国民の陽気さは損われることはなかった。かさかさのパン、玉葱一つ、それと水とで面白く時を過ごすことができた。彼等は陽気で、笑いを好む人種で、娯楽にうつつをぬかして遊び興じた。芝居を好み、闘牛を愛し、色々の催しや宗教上のいわれを持つ行列もあった。教会の祝祭日には、Madrid の Prado へ、Seville の Almedea de Hércules という並木路へ連れだって出かけた。この精神が practical jokes に彼等を興じさせた。Don Quixote を読む人は、このおとなしい、頭の狂った騎士を、無慈悲に翻弄していることに憤激を禁じえない。実際、主従の間に交わされる非常に面白い会話がなかったら、いまこの小説を苦痛なしに読めないであろう。処が Cervantes の時代の読者には、このような悪ふざけは、大いに笑って痛快がる種であった。

El Burlador de Sevilla という劇は、筋の支離滅裂なことは恐るべきものであるが、この中で Don Juan がはじめて登場する。これから数知れぬ翻案が出て来ているし、詩人や画家、彫刻家や作曲者が、これをテーマの源にしている。これは、いくら取扱いが拙くとも、一つの人間の type を創り出すことが出来たならば、その type は末代まで生き残っていくという実証になっている。スペイン文学の生んだ三つの type として、Don Quixote, Sancho Panza, Don Juan の三人は、永遠に不滅であると結んでいる。

第9章において画家 El Greco その他をとりあげて、彼の芸術論を展開している。芸術家の技法というものは、鑑賞には必須のものではない。むしろ鑑賞には邪魔になるかも知れない。画家が絵の鑑別で非常な誤りをおかすことが少なくないことを我々は知っている。それは技法に対する興味に捉われてしまい、技法と関係なく、作品に価値を与えるような美点を認めることが出来ないからである。技法は、芸術家が自分の目的を達する唯一の方法だからである。長い間かかって徐々に自分の身につけてきた、その知識の結果にすぎない。人の心を動かしたり、知性をかきたてることはできない。

芸術作品は、芸術家が意図すると否とに拘らず、伝達を提示するものである。芸術家の立場からすれば、自分の仕事の副産物にすぎないかも知れない。燕はひなを育てるため巣を作るが、その巣が強壯的要素がある故に、中国人に供するスープになることを燕は知らない。その伝達は二つの声になってなされる。芸術作品は、人生の苦しみからの気晴し、逃避というものである。しかし偉大な作品はさらにもう一つの声で話す。それ故にもっと高尚で、もっとよい結果をもたらす活動をなすことができる。

美術批評家が *Burial of Count Orgaz* (オルガス伯の埋葬) についていうように、上方の三角形と下方の三角形のことを論じたり、又 *San Maurizio* における内側と外側の構図のことをいい始めると、自分は嘆息するばかりで、絵はその全体を見るというのが造形美術の利点で、見る者の心を打つのは、全体的なものであると反論したくなる。

El Greco から得られるだけのものを得て、なお残るのは、作品のうしろにある個性である。人間は複雑なもので、その芸術家の作品をすっかり呑みこんでしまったあとにも、なお続いて興味となっている。かかる意味から、El Greco は古今にわたる最大の画家の一人とし、*Burial of Count Orgaz* を世界の傑作の一つと賞讃し、その手法を細部に分析している。

El Greco は人物の身ぶりについては巨匠で、つき出された腕や、あげた手、爪先立ちの足、伸ばした脚が優秀さを持つ。特に手に附与された美し

い身ぶりに、実に驚くべき感覚を持っていた。見る者を興奮させるのは、その際立った色彩のみならず、主題や形態や構造とも別個の、絵そのものにある何かである。それは画家の性格で、山の間にある湖の暗い底をのぞきこむ感じである。

Velasquez はおちついた明るい気質で、その絵は快適に陽気である。アンダルシア人の最も特色である *algeria* (陽気さ) を持っている。彼の彩管をふるう稀有な腕前、黒色に伴う銀色めいた光沢や、おちついた色調の豊かさは、何人も無視するわけにはいかない。しかし讃嘆はしても、その素晴らしい技巧が、それだけの価値のあるものかどうかと疑問を残すのである。再び El Greco に戻ってみると、表象によっても明瞭にあらわすことのできないような情緒を語ろうと求めている荒々しい激烈さがある。このような絵を描いたのは、平静な、明るい気質の人間でなく、摑みどころのない渴望に悩まされている不安定な気分から、自分の魂の深淵の中で、恰も意識の下に去来してなかなか思い出せぬ記憶のように、しきりに探り求める表現のため、苦しみながら懸命に努力している人間をあらわしている。

彼は活々とした美の感覚を持っている。だが、美をことに装飾的に見るという傾きがある。彼は贅美を好み、優美さということを特別重く考える。情緒的だが空想的である。うぬぼれが強く、非常におしゃべりで、機智に富み、演技的だ。深い洞察力と鋭敏な感受性によって、物の底に透徹することができるとしても、持前の軽薄さで、彼がそこから取出ものは、貴重な宝石でなく、ピカピカした装飾品である。創意に乏しいが、見事な彩飾に素晴らしい才能を持っている。彼は活力と光彩を持っているが、力強さを示すことは少ない。ひとり離れて、皮肉な態度で岸辺にたたずみ、人生の河が流れて行くのを見つめている。

Venice にある程度強くあらわれ、Rome において最も盛んだった精神即ち *baroque* 風の最大の画家となった。彼の絵には装飾のための装飾に対する関心が、次第に大きくなっているのが見られる。El Greco の描き方が

次第に奇怪になったのは、彼の狂気によるものと同時代の人間は考えていたが、人間のかたちを装飾として取扱うとき、自然にそうなるようである。El Greco はそれを狙ったにすぎない。彼が今日生きていたら、Bracque や Picasso や、Fernand Léger の後期の作品のような、抽象的な絵を描くであろう。しかし El Greco には、勿論彼のつくり出した奇怪な図型以上のものがあり、彼の優美さと卓越性、彼の描いた身ぶりの優雅さと劇的な強烈さがあり、これは彼の本性の冷笑的で、皮肉な、贅沢好みの意地悪い面を満足させたものである。彼の不思議な、説明し難い個性から出る最も真剣な感情を、カンバスに塗る色彩の中にあらわしたのである。

Ⅲ

Maugham が十数回にわたり Spain 旅行を試みた所以は何であったか。Don Fernando という一書を書かしたものは何であったか。この書を彼は *The Travel Books* の中に *On a Chinese Screen*, *The Gentleman in the Parlour* と共に入れてあるが、果して旅行記といえるものであろうか。筆者は Maugham の plays, novels, short-stories 等の文学作品の背景をなす思想を知るために、*The Summing Up* や *A Writer's Notebook* を座右の書として愛読しているが、*Don Fernando* を同じ系列に入れて考えたいのである。旅行記の形をとりながら、実は、Spain の風物記録ではなく、この国が最も繁栄をきわめた過去の Golden Age にさかのぼり、この国の持つ特異さ、しかも作家 Maugham をひきつけてやまぬものを探し求めた遍歴の記録と見たいのである。この生气溢れる Spain が如何に Maugham の興味を喚起したかは *The Travel Books* の序文に記されている。

When you read the plays and the novels that were written during the Golden Age, the lives of the saints and sinners, the history of the period, you gain presently a vivid impression of what those men were who, by means of clever diplomacy and profitable

marriages, had become masters of half Europe, and by force of arms had added vast territories to the crown of Spain. They were proud, punctilious, and elaborately courteous, passionate, brutal and ruthless, fiercely religious, but fond of a joke, especially a bawdy or a cruel one ; and when their passions were not roused, gracious, charitable and kindly.

(*The Travel Books, Preface*)

黄金時代に書かれた劇や小説、聖人や罪人の伝記、この時代の歴史を読む時、巧みな外交と有利な婚姻によって、ヨーロッパの半ばの主人公となり、武力により、スペインの王室に莫大な領地を加えた人間について、まのあたり見る印象を即座に得ることができる。彼等は誇り高く、律気で、礼儀に行届き、情熱的で、残忍無慈悲で、極端に宗教的であるが、他面、冗談、特に猥雑で残酷な冗談を好んだのであった。そして彼等の情熱が静まっている時は、優雅で、慈悲深く、親切であった。

無神論者の Maugham がこの国の宗教と国民との結びつきに驚異を感じたことも、みのがすことが出来ない。一つのエピソードとして、アルメリアの司教が諸所の聖地を遍歴した時の「ヨーロッパ旅行記」という書物をあげている。この司教が1489年から1494年まで五年間の苦難の旅のあと疲労困憊の末ギブスコア海岸の港市に着いた。その時すでに歩くことが困難になっていた僧を船にのせるべく、土地の僧侶たちが船長にたのみこむと、船長はくその人をわしの船に乗せてあげよう。ただこう伝えてもらいたい。わしは世界中の海を廻るために出かけるのだ。わしの船には、貿易商人はのせない、又わしの船に乗る者はすべて、船の仕事をしなければならない。わたしたちは、みんな自分の命を投げ出しているのだ。わたしたちがどういう運命に見舞われようと、神様が助けて下さることを信じている。わたしたちは、海をあっちこっちさまようのだから、吹く風が船をどういう所へ行きつかすか、わたしたちにはわからない。ただ神様がご存じなのだ……」と語った事が述べら

れている。即ち世界の歴史において、当時の Spain ほど、宗教が一般の人間の生活に深く入り込んでいた時代はないことをとりあげ、こういふスペインの人々が、このように力強く自己を征服することが出来たときに、世界の半ばを征服することが出来たのも、決してふしぎでないのである。〉と述懐している。

彼は St. Ignatius Loyola や St. Teresa の如き聖人、聖女の中に神秘思想をたどり、如何に Catholic の思想が国民の生活の中で脈動していたかを鮮明にしたり、悪漢小説を語り、*Don Quixote* を論じ、Lope de Vega の劇を鑑賞し、更に El Greco, Velasquez において芸術論を展開しているが、我々 Maugham 研究の徒には Spain の文化において教えられるよりも、その筆致を通して、Maugham 自身について教えられる。一言にしていうならば、Spain という舞台を通して演じられた人間劇、それが Maugham の興味の核心であり、Golden Age という歴史上の一時代をあらゆる角度から考えながら、実は彼の飽くなき人間研究であったと結論できるのである。この書の結びの言葉が、如実にこの事を実証している。即ちく彼等の卓越性は、たしかにすばらしかった。しかしそれは別の方面にあったのだ。それは、性格の卓越性であった。スペイン人は比類なき国民で、わずかにローマ人が匹敵する位と思う。この力強い民族の全ての精力、全ての独自性は、一つの目的、そしてただ一つの目的に向けられていたと思われる。即ち人間の創造ということである。彼等が優れていたのは、芸術においてでなくて、むしろ芸術よりも偉大なものにおいて優れていたのだ——それは人間においてであった。〉という言葉である。

